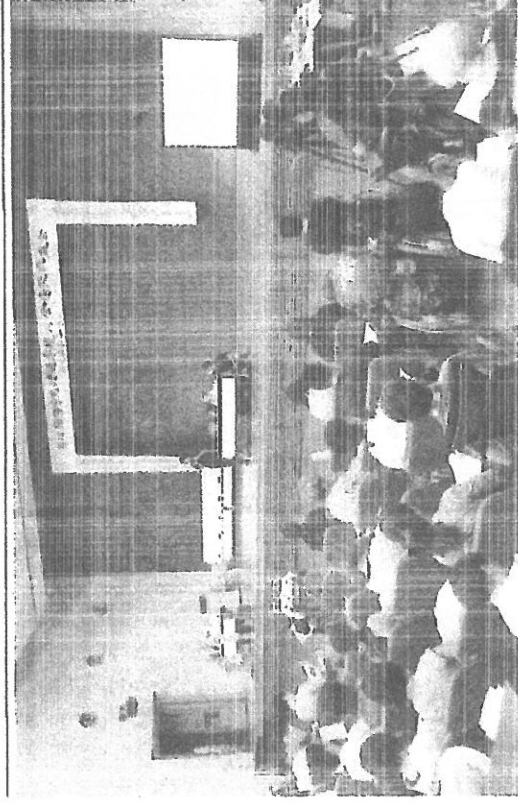


平成 29 年 (2017 年) 8 月 27 日 日曜日

障害児の教育や地域との共生を考える「障害児を普通学校へ 全国交流会」は、26日、熊本市中

障害児 地域の学校へ

熊本市で 全国集会 教育や共生考える



全国から約370人が参加した「障害児を普通学校へ 全国交流会」＝熊本市中央区

央区の熊本学園大で始まった。同日は講演や分科会があり、地域で安心して暮らせる社会

の表現を訴えた。障害児を普通学校へ、全国交流会など主催。27日まで。

全国から約370人が参加。ヒューマンネットワーク熊本事務局次長の植田洋平さん(27)は、昨年4月の熊

本地震の被災体験を報告。先天性ミオパチーで車いすを使う植田さんは「地域の小中学校で共に過ごした友人が助けに来てくれた。障害者が災害時も当たり前を受け入れられる社会にするために、地域の学校で共に学ぶことが大切」と述べた。

分科会では、障害児の親や団体が発表。常に医療的ケアが必要な橋村ももかさん(16)＝益城町＝の母、りかさ(45)は、地域の小中学校に通わせた経験を紹介。「娘は同年代の友達の中にいると、生き生きできる。地域で育ったからこそ地震でも周囲の人が気に掛けてくれ、孤立しなかった」と強調した。

27日も分科会などがある。(森本修代)

地域で学ぶ大切さ 考えて

「障害の有無にかかわらず、地域の学校に通いたい」。そう願う障害者や家族が26、27の両日、熊本市で教育や地域との共生を考える「障害児を普通学校へ・全国交流会」を開く。県内の当事者も登壇し、自身の体験を通して地域の子どもと学ぶ大切さを呼び掛ける。そのうちの家族を取材した。(清島理紗)

脳性まひの住谷菜音さん(14)＝熊本市東区＝は長嶺中3年。地域の学校に通うきっかけは就学前、小学2年生だった姉の乃香さんが両親に投げかけた言葉だった。「ママ、どうして菜音ちゃんと一緒に学校に行けないの?」

母親の理香さん(48)は「天も私も特別支援学校しか考えておらず、娘の素直な疑問に答えられなかった」と振り返る。

きょうだい一緒に
「きょうだいを同じ学校に通わせよう」と、近くの託麻南小や行政に相談を始めた。「前例が無く、難しいと言われたが、何度も話し合いを重ねて入学が実現した。菜音さんには、胃に通じたチューブから栄養や水分をとる医療的ケアが必要。学校に配置された看護師は見守りのみで、保護者がするように促された。理香さんは仕事の合間を縫って1日何度も学校に足を運んだ。校外学習や集団宿泊も付き添いが必要とされた。

理香さんは「障害児というだけで過度に気遣われ、普通



地域の学校に通い、共に育つことの大切さを訴える(後列左から時計回りに)住谷理香さん、乃香さん、橋村りかさん、ももかさん、住谷菜音さん＝熊本市東区

「障害児や家族ら

「普通学校に通いたい」

相互を知りたい
菜音さんも、ももかさんも学校では周囲から「なんでしゃべらなさんぞ」「生きろなぞ」とストレートな質問や感想をこぼられた。で

断言する。
仮設団地では、ももかさんが姿を見せると周囲の子どもたちが集まり、競って車いすを押し。母親のりかさん(48)は「ももかの存在を隠す、地域の中で育てただけだと

現在は同町の仮設住宅で生活する。自宅は熊本地震で全壊。同町にはバリアフリー仮設住宅が建設されたが、入居しなかった。それまで慣れ親しんだ地域住民とのつながりが絶たれてしまっただ。

存在隠さない
橋村ももかさん(16)＝益城町＝も脳性まひで重い障害がある。近くの学校教員の勧めがあり、津森小、木山中で学んだ。住谷さん家族と同様、看護師の配置や中学校入学時など数々の壁があったが、家族や協力者と一つずつ乗り越えた。

一方、菜音さんは学校生活を楽しんだ。休み時間にはいつも友人に囲まれ、おしゃべりの声やリコーターの音に満面の笑みを浮かべた。

の学校生活を阻まれていると感じた。こんな大変な思いは、今後就学する人や家族にさせたくないと思った」という。

26、27日 熊本市で全国集会
「第18回障害児を普通学校へ・全国交流会inくまもと」が26、27日、熊本市中央区大江の熊本学園大で開かれる。障害児を普通学校へ・全国連絡会(東京)など主催。当日参加も受け付ける。くまもと障害者労働センター ☎096(382)0861。

必要だ」と話している。
望ましい。ただ、特性によっては支援学校の方が適している場合もあり、その見極めが

た。
「医療的ケアが必要な子どもに詳しいおがた小児科・内科医院(熊本市北区)の緒方健一理事長は「地域の学校に通って刺激を受け、大きく成長する子どもは多い。障害があっても近くの学校に通うのが

も、理香さんらほどむだだが、互いを知りたい思いからの行動だと感じ、これしかっただいっ。

2017.7.24

この日は「熊本の伝統工芸展」が熊本市総合体育館で開催された。熊本の伝統工芸品を展示し、市民らを楽しませている。熊本市総合体育館は、熊本の伝統工芸品を展示する会場として、市民らを楽しませている。

熊本の伝統工芸展

「この日は熊本の伝統工芸展」



熊本の伝統工芸展。熊本の伝統工芸品を展示し、市民らを楽しませている。

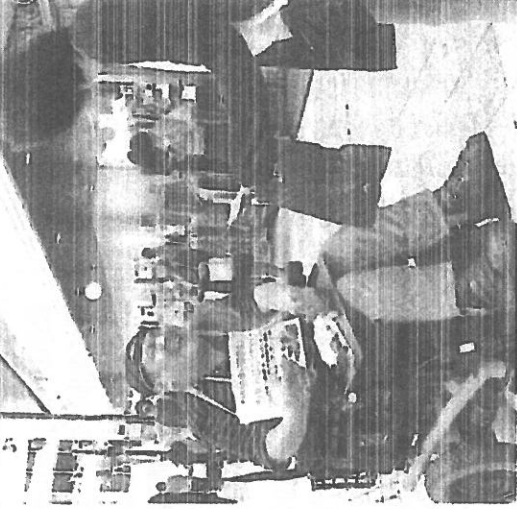
熊本の伝統工芸展。熊本の伝統工芸品を展示し、市民らを楽しませている。熊本の伝統工芸品は、熊本の文化を伝える重要な役割を果たしている。

熊本の伝統工芸展。熊本の伝統工芸品を展示し、市民らを楽しませている。熊本の伝統工芸品は、熊本の文化を伝える重要な役割を果たしている。



5

2017.7.24



街頭でメッセージを書いたビラと折り鶴を配る参加者(左)
＝熊本市中央区手取本町

神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が殺害され、27人が重軽傷を負った事件の犠牲者を悼み、事件の背景について考える集会在23

「排除しない社会へ」

相模原殺傷事件 熊本で集会

日、熊本市中央区手取本町の「くまもと県民交流館パリア」であった。

事件からまもなく1年と経つ中、県内の障害者団体などでつくる実行委員会が主催した。

実行委員会代表で脳性まひの障害を持つ倉田哲也さん(60)は、殺人罪などで起訴された植松龍彦さんが「障害者は不幸しか生まない」と語ったことに触れ、「どういった生き方をし、そんな考えに至ったのかを理解しようとしなければいけない」と指摘。「社会はよかれと思って施設や支援学校を作ってきたが、それによって当事者の決定権が奪われてきたのでは」と話した。

事件を巡っては、神奈川県警がプライバシー保護の必要が高いことや遺族からの強い要望を理由に、被害者の名前を匿名とした。

この日、参加者からは公表を望まなかった遺族の心情に理解を示す一方、名前を伏せたことを疑問視する声も上がった。益城町のユクノ仮設団地で障害を持つ長女ももかさん(16)と暮らす植村りかさん(46)は「障害者は『不慮者』とくつた差別に心を揺さぶられた。ひそくひそく『記号』だけで、人の命は奪えない」と話した。

子どもの障害の有無にかかわらず通常学級で教育する「インクルーシブ教育」の研究者、一木玲子さん(49)は「労働能力に照らして命を差別するのが健全な思想。色んな人と出会い、交わることで排除しない社会につながる」と話した。

(熊本朝日)